



はじめに

シナリオ・センター研修科の学習課程で創作したシナリオ「食品偽装」を収録しています。

映像にすると約10分のショートドラマになります。

この物語はフィクションであり、実在の人物、団体、企業とは一切関係ありません。

表紙：Elihu Vedder（1836年-1923年）「最後の男」（1886年）

人物

牧村 誓（ちか）（32）食品研究所職員

大乘 勝（56）品質管理部部長・執行役員

寺尾和人（32）誓の同僚

秘書

「食品偽装」シナリオ本文

○誓の家・居間（朝）

牧村誓（31）、仏壇に祈っている。

仏壇には牧村忠義（36）の遺影がある。

テーブルには週刊誌がおかれている。

○(株)日本スーパー本社ビル・外観（朝）

都心一等地にある高層ビルである。

○同・品質管理課部の廊下（朝）

誓、白衣を着て廊下を歩いている。

○同・品質管理部・部長室（朝）

個室である。大乘勝（56）、席に座り、新聞を広げている。

誓、大乘の前に立ち、テーブルに雑誌を置く。

誓「これ、ご覧になりましたか？」

大乘「朝から何？ 君は？」

誓「食品研究所の牧村と言います」

大乘「食品研究所の人間が、本社に来て何の用だ？」

誓、週刊誌の頁を広げる。

頁の見出しには『中国猛毒米偽装 日本スーパーの大罪を暴く』と書かれている。

大乘「はいはいその記事ね。週刊青春なんて低俗な三流雑誌の記事、信じるつもりかね？」

誓「中国産のよく検査されてもいない米を国産米と偽って、当社の系列スーパーで販売したと書かれています。事実でしょうか？」

大乘「事実無根のでっちあげだ。法務部を通じて損害賠償を訴えるつもりだよ」

誓「認めた方がいいんじゃないですか？」

大乘「何？」

誓「本部の検査体制が甘くて、業者から仕入れた米が国産か中国産か見抜けなかった。認めるなら早い方がいいですよ」

大乘「事実無根と言ってるだろう。品質管理部の検査にケチつけるつもりか？」

誓「どのお店どの商品に使われているか、システムで検索すればわかりますよね。早いうちに回収して、謝罪すべきです」

大乘「国産米と表示されている商品は、全て国産米だ。中国産の米など使ってない。週刊誌の記事なんかには踊らされるな」

誓「食品研究所の人間舐めないでください」

誓、白衣の袖から紙を取り出し、机に叩き付ける。米の成分検査結果である。

誓「お弁当の米の成分を解析してもらいました。国産米と宣伝されているお米も、中国産の成分です。科学は嘘をつきません」

大乘「君、これを誰かに見せたか？」

誓「いえ、けど検査すればすぐわかることです。隠し通せるものじゃありません。大乘部長、偽装を認めましょう」

大乘「その米、全国2千店舗に卸してるんだぞ。商品点数は約1千万個。回収だなんて言ったら、会社の信用がなくなる」

誓「人体に有害な化学物質も検出されました」

大乘、検査結果の紙をびりびりと破る。

大乘「うちはマスコミとも政治家とも太いパイプを持っている。うちが白だと言えば、白になるんだよ」

誓「お客様を裏切ることになります！」

大乘「研究所の人間が口出しする問題じゃない。経営会議で決まったことだ。帰れ」

誓「帰りません！」

大乘「君、そういえば名前、牧村と言ったね。もしかして、牧村さんの娘さんか？」

誓「.....はい。父をご存じですか？」

大乘「よく覚えてるよ。事件が起きた当時、同じ工場の勤務でね。牧村さんも君みたいにくそ真面目で硬い男だったな」

誓「父の時と同じ惨事は、2度と起こしたくないんです。今は食品衛生の研究をしています」

大乘「ひどかったよねあの食中毒事件は。もう20年以上前か。お父さん元気？ 今何してんの？」

誓「会社を辞めた後、亡くなりました」

大乘「お母さんは元気？　きれいな人だったけど」

誓「マスコミに叩かれて、毎日嫌がらせ電話もあって、耐えられないといって事件後、離婚しています」

大乘「何百人と食中毒起こした食品ばらまいたんだもんね。会社もだいぶ損害を被ったよ。よくこの会社入って来たね君」

誓「私、あの食中毒は、父が起こした事件じゃないと思ってますから」

大乘「面白いね君。お父さんは無実だとでも言うつもり？」

誓「食中毒を起こした商品が出荷された日、私が熱を出して、父は工場を休んでいたんです。あの日、工場を仕切っていたのは、大乘さん、あなたじゃないんですか？」

大乘「当時の工場長は君の父親、食中毒は工場長の責任だ。君、今度そんなこと言ったら、研究所にいられないと思えよ」

誓「大乘部長、正式に偽装を認めて、商品を回収してください。また同じ過ちを繰り返すつもりですか？」

秘書、部屋に入ってくる。

秘書「部長。執行取締役会の時間ですが」

大乘「悪い。邪魔が入った」

大乘、席を立つ。

誓「もう一度考え直してもらえませんか？」

大乘「君、2度と本社に顔出すなよ」

大乘、部屋を出る。

○(株)日本スーパー食品研究所・外観

地方都市山間部にある研究所である。

○同・研究室

誓、米粒をシャーレに入れて実験をしている。

寺尾和人(32)、誓の肩を叩いて、

寺尾「どうだった？」

誓「全然相手にしてくれない」

寺尾「こんなファックス来てたけど」

寺尾、ファックス用紙を見せる。

寺尾「週刊青春は、系列店全店舗の雑誌売り場から即時回収しろって通達」

誓「嘘？ なかったことにするつもり？」

寺尾「うち与党の政治家ともパイプ強いからさ、上は、裁判起こして記事を否定し続けるつもりじゃないの？」

誓「もう一度本社行ってくる」

誓、FAXの紙を握り潰し、歩き出す。

寺尾「よせって。行っても追い返されるだけだよ。誓のキャリアも危なくなるよ」

誓、歩みを止めて、振り返り、スタンドに立てられたハンディーカムを見る。

誓「寺尾君、実験記録用のハンディーカム、持ってきてくれる？」

寺尾「え？ 俺も？ 俺はいいよ」

誓「出世より大事なものがあるでしょ」

○(株)日本スーパー本社ビル・入口前（夕）

大乘、ビルから出てくる。

誓、大乘の前に立ちはだかり、

大乘「また君か？ 農水省の事務官と大事な会合があるんだ。どいてくれ」

誓「大乘部長。逃げるつもりですか？」

大乘「こっちはゴシップ記事の対応で忙しんだ。構ってる暇ないんだよ」

誓「逃げられませんかよ」

大乘「君、何か勘違いしてるようだが、私は品質管理部の部長で執行役員だぞ。他部署の一従業員が口出しするんじゃない」

大乘、早足で歩き出す。

誓、大乘と並んで歩く。

誓「また20年前の食中毒と同じことが起きますよ。会社として偽装を認めてください」

大乘「偽装はないし、汚染米なんて使ってない。これがわが社の公式見解だ」

誓「犠牲者が出てからじゃ遅いんですよ」

大乘、歩きを止めて、

大乘「誰が責任を取るんだ？ 私に責任を取らせるつもりか？」

誓「あなたの出世とお客様の命、どっちが大事なんですか？」

大乘「食中毒を起こした男の娘に言われたくないね」

誓、白衣の中からおにぎりを取り出す。

誓「このおにぎり、米の原産地日本になってますけど、検査結果は中国産のお米です」

大乘「貴様、会社の方針に逆らうつもりか？」

誓「骨軟化や腎機能低下を発症するカドミニウムに汚染されている可能性があります。大乘部長、このおにぎり、食べられますか？」

大乘「食べるわけないだろ」

誓「おかしいですね。国産米なら食べられるはずでしょう？」

誓、おにぎりを突き出す。

大乘、おにぎりをはらい落とす。

おにぎり、植木の方に転がる。

植木の中から、ハンディーカムを持った寺尾が立ち上がる。

誓「全部撮らせて頂きました」

大乘「貴様、隠し撮りとは卑怯な！ 訴えるぞ」

誓「これ以上は見苦しいですよ。大乘部長。非公式に公開されなくなかったら、公式に謝罪して、商品を即刻回収してください」

大乘、手を震わす。

誓「今度は、20年前と違う誠意を見せてくれますよね？」

大乘、鞆をアスファルトに叩きつける。

○誓の家・外観（夜）

一戸建ての古い木造の民家である。

○誓の家・居間（夜）

誓、父の遺影を持って、テレビを見ている。

テレビには、大乘の謝罪会見が映っている。

誓「お父さん、仇は取ったよ」（了）

食品偽装のシナリオ

<http://p.booklog.jp/book/80314>

著者：野尻有希

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/feltmail/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80314>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80314>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ